

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第801号 平成26年9月9日

子どもの難問

子どもから「どうして勉強しなければならないの?」「人は死んだらどうなるの?」といった、素朴だけれども根源的な質問をされて、答えに窮した経験をお持ちの方は多いと思います。

私は子どもの頃、親からよく「お父さんは外で働くのが仕事。子どもの仕事は学校で勉強する事」と聞かされ、実際、雨の日も風の日も、毎日夜遅くまで仕事をして、疲れて帰る父親を見ていて、「自分も学校をさぼってはいけないな」と思った事を思い出します。

「学校で勉強するのが子どもの仕事」といわれて納得していた自分を、今更のようにかわいい(?)と思いますが、現代の子ども達に同じ事をいおうものなら、多分反発されるだけで終わってしまうかなと思います。

子ども達の発する質問が難しいと感じるのは、その質問が核心をついているからだろうと思います。だから、何とかごまかしていい繕おうとするのですが、大抵は失敗してしまいます。何故なら、恐らく自分も子どもの頃、同じような質問を沢山して親達を困惑させていたはずなのに、いつの間にかそんな事も忘れて、世の中の事、自分の事を、深く考えもせず分かった気になって過ごしてしまっているからではないかと、反省しています。

素朴だけれど、根源的な子ども達の問いにどう応えていったら良いのだろう、それを考える上でヒントを与えてくれるのが「子どもの難問」という1冊です。

この「子どもの難問」では、

- ぼくはいつ大人になるの?
- 死んだらどうなるの?
- 勉強しなくちゃいけないの?

等22の質問に対して、野矢茂樹氏他日本の哲学界を代表する22人の哲学者が答えています。

1つのテーマに対して2人の哲学者が分担して応えていますので、それぞれの切り口や表現の違いが見えて来て、非常に面白く読む事が出来ます。



私が、塾頭通信を書き始めて一番感じているのは「難しい事を易しく表現する」事の難しさで、何時もこの事に悩まされています。ですから、「子どもの難問」という本に出会った時、哲学者の諸先生は、子ども達から発せられる難問にどう応えてくれるのかに興味が湧きました。

編者の野矢茂樹氏は、「回答者である哲学者の皆さんは、根本的な問題を剥き出しの丸裸で突き付けられて困ったかも知れないが、誰ひとり、逃げたりごまかしたりしていない。子ども達に語りかける口調でありながら、決して水準を下げていない」と述べていますが、私もそれは同感です。むしろ、子ども相手に剛球を投げ返すのは、いささか大人気ないのではと思う位です。

「ぼくはいつ大人になるの？」という問いに対して、熊野純彦氏は、「じぶんとおなじくらい大切なもの、かけがえのない事、置きかえのできないひと、そうしたなにかを知ることが、おそらくは「大人」になる入り口になるのでしょう」と述べています。そして、「ほんとうに「大人」になるためには、その大切ななにか、かけがえのない或るものを失うこと、大きななにかを諦めることが必要な気がします。」と述べていますが、その意味する事は深いと思います。

また、「勉強しなくちゃいけないの？」という問いに対して、斎藤慶典氏は「学ぶことは何か未知のもの、得体の知れないものに君が接してしまうこと、いや正確にはそれに触れられてしまうことなんだ」と述べると共に、「これが学ぶということなら、それは「しなきゃいけない」なんてケチな話じゃなく、すべてがそこから始まるような地点に君が身を置いていることだ」と述べています。

「なぜ生きているんだろう？」という問いに対する答えも見ておこうと思います。

神崎繁氏は、今生きている理由を自分自身に問わずにいられないのは、「問う自分」と「問われる自分」の歩調がどこか合っていないからで、あえてその答えを探すなら、「Why not? (さあ、生きようよ)」という事になるだろうか、と述べています。

同じ問いに対して、入不二基義氏は「生きている」のは、「生きている」事を深く経験するため、これが、何故に対する私の答えと述べています。

今紹介したのは、「子どもの難問」のごく一部ですが、難解で、読むに従い肩に力が入りそうな雰囲気です。

回答者の思いを子ども達がどれ程理解出来るかは疑問ですが、ただ、子ども達が大人になった時に、ハタと「こういう事だったのか」と感じ取る事が出来たら、それは素晴らしいと思いますし、そうあって欲しいものです。

「子どもの難問」は、いってみれば哲学書であり、大人にとっても歯応えのある1冊だと思います。

編者の野矢茂樹氏は「私たちの多くは、たえず前に進む事を強いられている。そ

して哲学は、私たちを立ち止ませようとする。」と述べていますが、「子どもの難問」は、追われるように日々を過ごしている私達にとって、一度立ち止まって小休止し、自分の人生を考えるきっかけを与えてくれる1冊だと感じています。

(塾頭：吉田 洋一)